

音韻 (史的研究)

沖 森 卓 也

一

言語の歴史をよく記述できるのは文字資料であるが、近年は豊饒な資料が陸続と発見されるということは少なくなり、また過大な期待も抱けなくなつた。そして、記述された言語事象を理論的に説明しようという志向性の強い論文が増えつつある。もとより、いわゆる国語学が旧来の方法論と学問的価値のみを退嬰的に墨守することは、言語学一般に徴するに衰退でしかない。その意味で、多様な方法論と解釈はそれ自身排他的でありながら、ともに言語の一断面を切り取ってみせる。そして、それぞれの主観性は共同主観的に言語の姿を構成していくのである。抑々資料研究と理論研究は車の両輪の如き相関的なもので、前述の志向性も単に重心の差にすぎない。このような状況において、極めて主観的に見渡せば、一つには、すまき——資料と資料、時代と時代など——を埋めようとする事、それは同時に、ある言語事象と他のそれとの関係づけ、そして差異と同一性の把握でもあるということ、また一つには、言語的事実の再確認という反復を通して再発見しようとする事、それは単なる繰り返しの作業ではなく、既出資料に沈潜するまなざしによって新

たなる差異を見出すということ、そのような方向性が目に映る。しかし、展望の視点が私という主観に属する以上、その個々の論文の持つ深みを筆者の力量では十分に描ききれない。ただ、ながめたに過ぎないことをまずはお断りしておく。また、奥付の発行年が昭和六十一年・六十二年であるものを対象とし、紙幅の関係で専ら音韻史を扱った論文にのみ限定した。

二

国語音 次のような単行本が上梓された。森重敏「統上代特殊仮名音義」(昭62・2)は前著の上代五母音説の観点から乙類の本質と実態を語彙を通して具体的に論述したものの。山田実「古代音韻の比較研究」(昭62・5)は琉球語との比較から古代語の音韻を推定する。「言語文化くさくさ」(亀井孝論文集5、昭61・8)は「音便名義考」などを、浜田敦「国語史の諸問題」(昭61・5)は「音韻論的解釈」「促音と撥音」「長音」などを収めている。また、森山隆「上代国語の研究——音韻と表記の諸問題——」(昭61・11)、「橋本四郎論文集」(国語学編・方葉集編全二冊、昭61・12)はいずれも生前に発表された論文をまとめたものである。現職のまま惜しくも鬼籍に入られた両氏

に改めて哀悼の意を表する次第である。これら単行本は書評・紹介もあるので詳しくはそれらに譲ることとする。

論文では、古代語について見ると、小倉肇「上代日本語の母音体系(上)——オ列甲乙の合流過程に係わる問題——」(弘前大学国語国文学)9、昭62・3)は上代の母音体系に関する八母音素説並びに七母音素説を批判し、この十数年間の研究史を要説したもので、オ列甲乙の合流については次号で述べるといふ。氏の指摘する、中国原音と上代語音韻との対応関係における transiteration (音訳) と transcription (転写) との区別は、中国原音を用いて上代語の音韻体系を探る際に心得ていなければならない点である。同類に属する字音の共通点ばかりに捉われるのではなく、それが十分に音韻論的解釈が加えられた結果の文字選択であるのか、中国語音による transcription に問題点がないのかということなどにも考慮が払われねばならないであろう。釘貫亨「単音節語(幹)に生じた特殊仮名遣(オ列音)の違例」(京都教育大学国文学会誌)21、昭61・11)はオ列の甲類・乙類の対立崩壊に関する筆者自身の従来の主張を単音節語(幹)の違例を通して論じたもの。ここでは「単音節語(幹)」というように性質の異なるものをまとめているが、単音節語と動詞の単音節語幹とは区別した方がわかりやすいように思う。また、トヅバ(飛ぶ)未然形、トヅ(飛ぶ)終止形)といった動詞活用形における音節結合がどのような音的環境にあったのか、更に論が深まることを期待したい。同氏には「仮名の分布より見た/o/、/ø/の対立崩壊の諸問題」(富山大学人文学部紀要)11、昭61・3)もあつた。池上啓「書紀β群」における哈(仄)韻字対オ列使用例について」(学習院大学上代文学研究)12、昭62・3)は、書紀β群が哈(仄)韻字をオ列音に用いる理由に

ついて登韻と同一視するなどの字音知識上の誤解に基づくとする。ハ行子音については、大出あや子「P音考」ひとり歩き考」(解釈)32—12、昭61・12)、清瀬義三郎則府「平安朝波行子音P音論——修正」(音声学會会報)181、昭61・4)などがあつた。後者で「在唐記」の「皆加唇音」を「皆唇音ニ加フ」と解釈するが、「加フ」が他動詞である以上、「唇音ヲ加フ」と読むのが自然ではなからうか。

中世語では、迫野虔徳「中世的撥音」(国語国文)56—7、昭62・7)は中世の撥音には一時的現象としてンとウの二項が対立的に存在したと論じたもの。柳田征司の、母音連続の観点からのバ・マ行四段動詞の音便に関する所論を批判し、これまでの諸説を再吟味しつつ音韻として区別された二種の撥音を積極的に認めようとしたことは興味深い。ただ、その撥音に「ン／ウ／ウ／ウ」と想定されているが、亀井孝の説による鼻母音「U」はこの／ウ／ウの音価となるのであろうか。鼻母音と言いながら鼻音りを想定するにはもう少し説明が欲しいところである。同氏には「促音・撥音表記の動揺——天正正言本——の場合」(文学研究)84、昭62・2)もあつた。蔵野嗣久「室町時代語資料」北野目代日記・記録」の音韻表記「仮名「ツ」ニ「ム」の混用について」(安田女子大学国語国文論集)16、昭62・6)は、当該資料における促音と撥音の表記法の混用を指摘し、それがシラビーム構造に起因することを述べる。辛島美絵「国語資料としての仮名文書——鎌倉時代のオ段長音の開合と四つ仮名の混乱表記を通して——」(国語学)146、昭61・9)は、鎌倉時代の古文書におけるオ段長音の開合と四つ仮名の混乱例を博搜して、従来の指摘の誤りを正すとともに、その混乱を主として語のレベルの混乱と捉え、非上流階層の人の手になるものに集中していることを明らかにする。翻字に頼る研究方法に対す

る警鐘となる好論である。今後の南北朝以降についての論考に期待したい。崎村弘文「連声小考」(『文献探究』18、昭61・9)は連声を音声学的に考察しようとするもの。

近代語では、岸田武夫「近代語における拗音縮約の現象について」

(『梅花女子大学文学部紀要』(国語、国文学)21、昭61・12)は、連接する二音節のうち、(1)あとの音節がヤ行音である時、前の音節の尾母音が消滅して一拗音節となる、(2)前の音節がイ・エ列音である時、

「 $\text{i} \cdot \text{e} \cdot \text{a}$ 」の母音が口蓋化して一拗音節となるが、この場合あとの音節が頭子音を持つならば、その頭子音は消滅すると説く。同氏

には「近代語における撥音添加の現象について」(『近代語研究』7、昭62・2)もあつた。高山倫明「『東洋客遊略』の音訳漢字表記について」(『文献探究』19、昭62・3)は清代に著された『東洋客遊略』の長崎町名表記を通して、ハ行子音等について考察した。矢島正

浩「近松世話浄瑠璃における形容詞連用形のウ音便について」(『国語学』147、昭61・12)は、近松におけるウ音便は発音のしやすさや原形との聴覚印象面での隔たりの少なさなどに左右され、また、口語性を帯びている場合に使用されることなどを述べる。同じく上方語の音便を扱ったものに、山県浩「上方絵入狂言本の音便状況(上) 小言」

(『群馬大学教育学部紀要、人文社会』35、昭61・3)があつた。清水康行「^{二十世紀}初頭の東京語子音の音価・音訛」(『落語レコードを資料として』(築

博土遺 歴記念)『国語学論集』昭61・3、以下「国語学論集」と略す)、「^{二十世紀}初頭の東京語母音の音価・音訛」(『落語レコードを資料として』(古橋記念)『国語研究論集』昭61・10、以下「国語研究論集」と略す)は、レコードの聴取を

通して当時の音声を探ろうとしたもの。「はなしことばの音声」(『世紀初頭東京落語レコード資料の場合』(『国文学解釈と鑑賞』52-7、昭62・

7)は前記二論文を簡略にまとめたもの。

よみくせについて論じたものに次の論考があつた。遠藤邦基「平安時代の和歌とハ行転呼音」(『泡』を「あは」と表記することの意味)「(叙説」13、昭61・10)は、和歌の掛詞や字余りなどに見えるハ行転呼音の考察を通して、平安時代の和歌は非転呼音で読まれたことを述べる。

「泡」はアワという発音であるが、誤まった回帰に基づいて「あは」と表記するため掛詞としても機能するものであり、また語頭以外の「ひ」もそのままヒと読むから字余りとはならない。つまり、

馬淵和夫の「平安仮名づかい」は単なる仮名遣にとどまらず、読みをそのまま反映したものであると説く。文字と読みとの対応関係を無理なく説明して注目される。このようなよみくせを反映して

いる資料群が限定できるならば、よみくせの由来、また、よみくせの行われる範囲に関して手掛りが得られるようにも思われる。続篇を期待したい。田中由紀子「よみくせ注記の「背景」——古今集と「百人一首」の相違から」(『叙説』13、昭61・10)は、よみくせ注記を注記的機能だけでなく、歌書を音読する際の発音の指定であるとし、近世

前期の皇室のよみくせ注記資料の転呼音注記を手掛りに「古今集」はハ行の仮名はハ行音のままで、「百人一首」は普通に転呼音で読むが、この相違は両作品の音読の歴史に起因するもので、「伝授のレペ

ルの違い」によると説く。

三

漢字音では、沼本克明「日本漢字音の歴史」(昭62・6)、高松政雄

「日本漢字音概説」(昭61・10)、湯沢質幸「唐音の研究」(昭61・2)が刊行された。「日本漢字音の歴史」は国語学叢書のシリーズの一人で、

平安鎌倉時代までの漢音・吳音を中心として日本漢字音史の概略をわかりやすく記述してある。室町時代以降については簡略であるが、従来この分野に適当な概説書が見当らなかつた中で、本書は啓蒙的な恰好な入門書となるであろう。「日本漢字音概論」は「概論」と銘打つものの、日本漢字音の全般の粗あらを説いたものと言うよりも、かなり専門的な字音論を展開する方向でまとめられていて、前者「日本漢字音の研究」を補うが如き性格を有している。その中で、中世的唐音・近世的唐音と名づけられた唐音に関する記述は「概論」の名に相応しくその概略を鳥瞰させてくれる。また、「唐音の研究」は既発表の論文をまとめたもの。

論文では、沼本克明「古辞書・音義の音注と漢音」(『国語学論集』)は古辞書・音義の九書について尤韻・侯韻の明母字を手掛りに当時の漢音(正音)を意図的に表示しようとしたか否かを調べ、漢音の伝承のあり方を探つたもの。「和名類聚抄」「唐招提寺本孔雀経音義」は漢音表示を意図したのだが、「篆隸万象名義」「法華経釈文」などは韻書等から単に抜き書きしただけで、典拠のある音注なら何でもよかつたと説く。また「読誦漢音に於ける字習音の紹介―蒙求字音点の場合」(『鎌倉時代語研究』10、昭62・5)は漢音の伝承に対して反切による学習音がどのように介入しているかを、蒙求字音点四本を通して考察し、声調が改変修正されることがあると述べる。「鎌倉宋音資料―小叢林略規」(『鎌倉時代語研究』9、昭61・5)は版本を影印し、解説を付したものの。ただ、「宋音」「唐音」という名称を鎌倉室町時代、江戸時代にそれぞれ移植されたものとして敢えて使い分けすることは、本来同義で用いられてきた用語であることから、混乱を招きかねないようにも思われる。江口泰生「シウ」・「シュ」・「シユ

ウ」(『文献探究』18、昭61・9)は法華経单字における「イウ」形と「イユ」「イユウ」形とは構造の異なる反切を有していて、吳音系の虞韻・尤韻の祖音形にシウを想定し、シユとなる一方、シウからシユウに転じたとする。同「大般若波羅蜜多経」読誦音について―資料の解釈と読誦音の変遷―(『語文研究』62、昭61・12)は安田八幡宮藏本と慈光寺藏本及び観智院本類聚名義抄によって大般若経読誦音を探ろうとしたもの。ただ、名義抄和音は仮に大般若経読誦音を伝えるとしても二次的資料であり、読誦音の変遷を考察するには他にも大般若経の加點本があり、まずはそれと比較考察すべきであろう。例えば、築島裕「大般若経の古點本について」(『国語研究論集』)には大般若経加點本の所在が列挙されており、また、「古訓点資料集一」(『東京大学国語学叢書』15、昭61・4)には鎌倉初期写の加點本も収められている。また、同氏には「東国文献としての「天正狂言本」―動詞の音便形について―」(『文献探究』20、昭62・10)もあつた。その他、南北朝時代加點の大般若経について論じたものに、鈴木泰「石行寺藏大般若経の字音について」(『国語学論集』)があつた。佐々木勇「吳音二音節去声字に対する上声加點例について」(『国文学攷』113、昭62・5)は、鎌倉初期において、吳音二音節の去声字は句中・語中で直前の声調の影響によって上声に変化する場合、m、n、u 韻尾のものが声調変化しやすく、i 韻尾のものはほとんど見られないとし、m、n、u 韻尾字を一シラビームとして捉えたために一音節去声字と軌を一にする声調変化が見えるとする。一音節去声字については同「吳音一音節去声字の上声化の過程」(『鎌倉時代語研究』10、昭62・3)があり、今後の世代別個人別の詳論が期待される。榎木正薫「光明真言土沙勤信記の声点について―輕声声点は意図的に差声されたものか―」(『鎌

倉代代語研究」9、昭61・5）は、軽声は意図的な差声であるが、従来考えられている条件に適合しないものも多く、軽重を区別する意識の低下を指摘する。阿久津智「室町時代の唇内入声字音について」〔文明本館用集〕を中心に、「〔立教大学日本文学〕58、昭62・7）は入声の「一ツ」表記の成立をめぐる論じたもの。また、古辞書の字音に関しては沖森卓也「世尊寺本字鏡の漢字音について」〔国語学論集〕があった。

高松政雄「中世的唐音」〔岐阜大学国語国文学〕18、昭62・3）は、前半で唐音という名称と語誌について論じ、後半で「寮・家・念」字などの中世的唐音の音形に言及している。同「近世的唐音の音体系」その二、韻母の面よりの考察」〔国語国文〕55—6、昭61・6）は前掲書に所収されたもの。同「漢音の清濁」〔国語国文〕56—9、昭62・9）は字音における濁音把握をめぐる論じたもので、日本語音韻体系における清濁の実態に絡む問題であるが、規範と慣用という意識のあり方を見る上でも興味深い。岡島昭浩「近世唐音の重濁性」〔語文研究〕63、昭62・6）は近世唐音を黄肇宗の字音資料十五書を通して考察し、それらが少なくとも三つのグループに分けられることを論ずる。唐音研究は目下のところ各宗各派の読誦音を厳密に分析する方向に進むのであろう。また同氏には「元禄期における字音M尾N尾の発見」中村楊彦の「韻字私言」〔文献探究〕18、昭61・9）などもある。

四

アクセントでは、奥村三雄「波多野流平曲譜本の研究」〔附録 参音曲鈔 影印本〕（昭61・6）の刊行があった。論文では、同「アクセントの変化」ア

セント型式と所属語彙の問題」〔論集日本語研究2歴史編〕昭61・11）は、二音節名詞第五類に属する語は中世前期以前ではごく少なく、アクセント型式の種類のみ捉われず、各型式の所属語彙にも十分注意すべきだと述べ、具体的な面に重点をおいたアクセント史考察の一環として「アクセント核をなるべく語の中央部に置いて語形式の安定性を保とうとする」現象について、三、四拍語を例にして考察する。変化の一般理論を構築する上で一つの提言となるであろう。秋永一枝「古今集声点本における形容詞のアクセント」〔国文学研究〕88、昭61・3）は金田一春彦が「四座講式の研究」で推定したアクセントの型を確証するとともに、二拍語に去声点を認め、例えば運用形が●○型から●●型に変化したのは院政期末から鎌倉時代にかけてであることを述べたもの。同「袖中抄」声点考」〔国文学研究〕93、昭62・10）では袖中抄の声点注記の善本四本を紹介し、顕昭の注釈に就いて声点注記は密接不可分であり、また変化したアクセントの型を差声した例もあって、その変化の時期もかなり特定できるといふ。

後藤祥子との共編で「神中抄声点付語彙索引」〔アクセント史資料索引〕6、昭62・10）も刊行されている。去声一般の変化との関係についても統考が期待される。鈴木豊「平安鎌倉時代における助詞」のアクセントについて」〔国語学研究と資料〕10、昭61・12）は主として日本書紀の声点を手掛りに助詞「の」が○●●●●●型では高く接続する例、低く接続する例ともに存在していることを説く。同氏には他に「乾元本紀所引『日本紀私記』の声点について」〔国語学研究と資料〕11、昭62・12）、「和語の声点資料における差声の体系について」〔日本書紀〕声点本を中心として」〔早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊12文学芸術編〕昭61・1）、「古語拾遺声点付語彙索引乾

元本日本書紀所引日本紀私記声点付語彙索引」(「アクセント史資料索引」4 昭61・2)があった。西崎亨「東大寺圖書館藏本華嚴祖師伝所載の国語アクセントについて」(「汲古」10、昭61・12)は、その傍訓のアクセントを考察し、名義抄の去声拍を上声拍にしている例もあることから平安時代のアクセントよりも新しいものと推測する。

永田信也「『和歌童蒙抄』の付声点語」(「史料と研究」16、昭61・5)は尊経閣文庫蔵本に声点が付されていることを報告したものの。上野和昭「平曲の譜記とアクセント」(下げ)にあらわれる譜記の検討」(「国文学研究」89、昭61・6)は、自立語に付された「下げ」などの譜記とアクセントの関係を考察し、謡曲譜本や近松淨瑠璃譜本などと同じくアクセント資料として利用できる可能性のあることを論じたものの。同「平曲譜本にみえる姓・地名のアクセント」(「徳島大学総合科学部創立記念論文集」昭62・3)もあった。坂本清恵「義太夫節の掛詞」(「近松世話物浄瑠璃譜本を資料にして」(「国文学研究」93、昭62・10)は掛詞がどのようなアクセントで語られるかを譜本によって検討したものの。掛詞の享受のあり方を示してはおもしろい。また同氏には「胡麻章を読む」(「近松浄瑠璃譜本の場合」(「国語学研究与資料」11、昭62・12)、「近松世話物浄瑠璃胡麻章付語彙索引体言篇」(「アクセント史資料索引」5、昭62・1)があった。

語源との関係について論じたものに、山口佳紀「語源とアクセント」(「いわゆる金田」法則の例外をめぐって」(「国語研究論集」)があった。氏は金田一春彦の唱える派生に関する式保存の法則にあてはまらないものについて、同じ語構成である語群の有力なアクセントの型への類推、意味分化、母音交替などその原因を模索しつつ論じ、アクセントの高起、低起が一致しない場合でも同一語源ではないと言いつ

れないことを説く。複合語以外の場合は、原アクセントの保存の法則に合致しない例があることは、私(沖森)もかつて論じたこともあり、意味・文法的機能の分化などによることを想定したことがある。派生におけるアクセントの変化は、言うまでもなく古代語の方言間における借用や発音上の経済性に基づく置換なども考慮せねばならないが、アクセントが弁別特徴として十分に機能していない状況を勘案するに、形容動詞ラカ、ヤカ型が低起式で末尾が●○となる、アクセントの山を語の中央部に置く安定した型に集約されるといった、類推によることが多いのではなからうか。そしてまた、その同一化への圧力は逆に差異の産出をもたらし、アクセントの型を転換させたことも考えられる。ただ、その類推や転換が不規則的であるため、論理的な説明に窮するが如き印象を与えがちであるが、幅広い観点から具体例を中心として個別的アクセント変化とその要因をも考えてゆかねばならないであろう。

桜井茂治「アクセントの「類」ができるまで」(「アクセント成立論」)「(「国立音楽大学研究紀要」20、昭61・3)、同「日本語アクセントの成立」と音韻(母音)」(「アクセント成立論」)「(同21 昭62・3)は副題にあるように、いずれもアクセントの成立に関して考察したものの。後者は末尾母音がイ列・エ列である名詞を例に、甲類・乙類音とアクセントの関係論じる。前者は高平型・低平型の二類を基本にして他の類が派生したが、品詞によってその過程は異なるかと推定する。これまで論じられたことがないテーマであり、注目される。

遠藤邦基「振漢字による一種のアクセント表示法」(「江戸初期堂上系間書類を中心に」(「国語国文」56・7、昭62・7)は転呼の可能性のある仮名よりも振漢字の方が音声注記として勝れていることから、そ

れをアクセント表示にも用いた資料のあることを明らかにしたものが見られる。毛利正守「音群に基づく平安朝和歌の唱詠」『詞華和歌集』の単独母音を手がかりに」(『文学』55—2、昭62・2)は坂野信彦「王朝和歌の律読法」(『文学』53—6)を批判したもので、坂野の「延音」の恣意性を問題とし、音列を単語もしくは単語間の緊密度に応じて、多くは「三・四」や「二・五」などの音群をもって詠まれるようになったと述べる。この坂野論文に対する批判は寺杣雅人「平安朝和歌のリズム——単独母音を含む非字余り句からの考察——」(『尾道短期大学研究紀要』36—2、昭62・10)にも見える。寺杣は従来より主張する「等時音律説」に立脚して詞華和歌集におけるリズムを論じるが、毛利論文には触れていない。氏は、各句とも二音を一拍とする四つの拍から構成されるとし、五音句も七音句も各音を

五

韻律については、近年平安時代の和歌のリズムについて論じたものが見られる。毛利正守「音群に基づく平安朝和歌の唱詠」『詞華和歌集』の単独母音を手がかりに」(『文学』55—2、昭62・2)は坂野信彦「王朝和歌の律読法」(『文学』53—6)を批判したもので、坂野の「延音」の恣意性を問題とし、音列を単語もしくは単語間の緊密度に応じて、多くは「三・四」や「二・五」などの音群をもって詠まれるようになったと述べる。この坂野論文に対する批判は寺杣雅人「平安朝和歌のリズム——単独母音を含む非字余り句からの考察——」(『尾道短期大学研究紀要』36—2、昭62・10)にも見える。寺杣は従来より主張する「等時音律説」に立脚して詞華和歌集におけるリズムを論じるが、毛利論文には触れていない。氏は、各句とも二音を一拍とする四つの拍から構成されるとし、五音句も七音句も各音を等時に配する、ただし三音で切れる音群で始まる七音句だけは最初を休止とする読み方を主張し、その読み方は詞華和歌集の非字余り句の約九七%において母音だけの音節を奇数番目に位置させると述べる。坂野信彦の論考はこの展望の対象年度外であって(『現代日本語律読法とその成立』(『中京国文学』5、昭61・3)などはあった)、特に言及しないが、各句が二音一拍の四拍構造であるとすると寺杣雅人などの主張は、確かに現代における和歌の朗詠ではそのような印象を持つであろうが、それは現代語がモーラ(拍)という音節単位を明確に有しているからであって、平安時代に適用できるかどうかは証明

されていない。抑々リズムは周期的に繰り返される構造をいう。古代歌謡のリズムについて、神楽歌は不均拍が多く、琴歌も不均拍を本旨とし、これに対して催馬楽は原則として均拍であるという。このように、音楽的には等時間的な単位を現代と同様に一律に設定するには問題がある。また、単に音群に分けるというのでは意味の上で句切ったにすぎず、リズム論とは言えない。ただし、一拍子間に二音が配置されることは催馬楽などの譜にも認められる。しかし、同時に四音が配置される場合もあるなど、様々な譜が存していて二音一拍以外の構造も検証されねばならないだろう。古代歌謡と和歌を無前提に同一視できないが、音数律から見ても両者がリズムの上で密接な関係があると思われる。林謙三「雅楽 古楽譜の解説」によれば、琴歌譜の「片降」の歌詞の配置は、一拍子を二分の二(四分の四)一小節とする、一音につき二分の二(四分の四)一小節だという。例えば「高橋扶理」で言えば、「み・ちの　一・へ、の　一は、り　一・と・おく　一ぬ、き　一と・し　一な　め　エ　一く　ウも　一(以下略)」(傍点は拍子、片仮名は延声にあたる)のように想定される。ここには延声や技巧的旋律などを用いる余裕は十分にあつたと考えられ、延声も右例では偶数番目の拍子の最初の音に出現する傾向にある。こうした繰り返しこそが歌のリズムというに相応しいであろう。勿論、和歌にはそれ独自のリズムがあるに違いないが、このような歌謡からのアプローチも欲しいところである。いづれにせよ、単独母音は音質において延声と混れやすい性質をもっているため、「うた」においてはやや不安定な音節であつたことは十分に考えられる。その点で単独母音の位置を探ること自体無意味であるとは言えないが、二音一拍としてその拍の最初にのみ単独母音が位置すべきであ

るといった考え方によるリズム論に疑問をもつのは私一人だけであろうか。

また、毛守には「平安朝和歌におけるリズム論——詞華和歌集を中心に——」(『文学史研究』28、昭62・10)もあつたが、単語結合という場合、非韻文的な日常語におけるものと、和歌のような朗詠によるものとは位相的な差違があることは明らかである。上代語はほとんどが韻文にしか残っていないことから、その両者を区別することはかなり困難な面もあるが、一応の区別が必要であろう。と同時に、上代と平安朝の和歌のリズムは、言語及び表現の構造全体の比較を踏まえた上で論じられるべきではなからうか。

多少個人的な興味に流れてしまったが、韻律論も音韻論の一領域として無視できない故、敢えて取り上げた次第である。議論が深まり、そして結実することを切望する。

六

以上で、本稿を終える。十分に目が行き届かず、この展望に当然言及せねばならなかったものも多いかとも思われる。また、各執筆者の所論に対する誤解もあるかも知れぬ。ともども御寛恕を請う次第である。

——立教大学助教授——